

残^{ざん}月^{げつ}杜^と鵑^{せん}

菊^{きく}池^ち三^{さん}溪^{けい}

人^{ひと}は言^やう^う声^{こゑ}月^{つき}に在^あり
吾^{われ}は疑^{うたご}う^う月^{つき}声^{こゑ}有^ありと

月^{つき}落^おちて声^{こゑ}還^{また}断^たゆ
一^{いっ}川^{せん}卯^ぼ花^か明^{あき}らかなり

【作者】菊池三溪(一八一九〜一八〇九一年)(文政二年〜明治二十四年)・は江戸時代後期から明治にかけての漢学者。通称は純(紀)太郎、角右衛門。名は純。字は子颯。別号は晴雪楼主人、鉄屏書屋主人。和歌山藩儒の家系に生まれ、安積良斎(あさかごんさい)にまなぶ。江戸幕府奥儒者に拔擢されたが、政変のため下総国に退隠し、明治初年まで常総諸藩を点々とした後、東京や京都で著述活動を行った。明治のはじめ「大日本野史」の校訂にあたった。明治二十四年十月十七日死去。七十三歳。名は純。
【通釈】人は杜鵑(ほととぎす)の声が月の辺りですと云うが、私は月が啼(な)いたのかと思つた。
月が没して声もまた消え、川辺の卯(う)の花が美しく映えるばかりである。